

月照と西郷

作詞 葛生桂雨 作曲 初代橘旭宗

安ま尊はま急る平よれ及は国しをた摩名國やを身月心は郷入は、り
る始が彬しはあ、京逃追藩のと手つ薩、野歌盃。いと今西に照りと
よが盛齊と彬はいとの摩向うの悟でし平唐、たない、く共月なを
に獄隆津う齊派郷伴へ府薩日よ府と船出、ぎとや興ま所いても照す屑一
老獄郷島そ、夷西を藩幕たをし幕ぬ、ぎとや興ま所いても照す屑一
大大西る出が攘と臣摩。得は漕も笛にしき救して月ま藻はす
伊の、すをた、照國薩す恐照追すれ人のの歌わ置を尽立、しの郷め
井政り敬兵し死月野りまを月へま逃二瀉月臣和交の照を手は水海西と

藻塩焼く 煙の末も柵引きて

水遠白き薩摩瀉 峨々と峙つ海門を

漕ぎ出でし船は追風に 真帆打揚げて走り行く

船の中なる人々は 月照上人を始めとし

西郷吉之助隆盛 平野次郎國臣

外に一人は上人に 従ひ来つる中間の

重助なりと知られたり 時は安政五年の

霜降月の望の夜に 隈なく照らす大空の

月冴え渡る青海原 東の方は大隅や

西は薩摩の磯の先 御船が崎の名所さへ

手に取る如く見ゆるなり 赤壁潭のそれならで

肴は鱸酒は灘 雲井に一つ澄める月

輝く三つの杯を さしもめぐらす巴座や

帆手うつ風もはたくと ひまなく船にぞおとづる、
こゝに月照上人は 如何に方々今宵こそ
近頃希なる名月を 徒見ん事の惜しければ
風流心に唐歌や 大和言の葉歌ひなば
互の憂をいさゝかは 晴らす方便となりぬべし
先づお恕しと云ひながら 聲朗らかに詠じける

船人の心づくしに波風の
危うき中を漕ぎ出でにけり

國臣杯右手に持ち 耳打澄まし聴きみしが
實に道理の御歌や 此の世の中を皆空と
悟り給ひし上人も 國の為には千金の
御身を惜ませ給へかし 思へば幕府の奴原が
我が大君の御稜威をば 汚すは斯くも明らけき
月の光りを村雲の 掩へるさまに似たるぞと
空打仰ぎ遺瀨なき 悲憤にたへぬ風情なり
隆盛莞爾と打笑みて やよ平野氏酒盛の
興をさますな兔に角に 今宵ばかりは慷慨の
思ひを廣き蒼海の 水に流して終夜

國臣杯右手に持ち 耳打澄まし聴きみしが
實に道理の御歌や 此の世の中を皆空と
悟り給ひし上人も 國の為には千金の
御身を惜ませ給へかし 思へば幕府の奴原が
我が大君の御稜威をば 汚すは斯くも明らけき
月の光りを村雲の 掩へるさまに似たるぞと
空打仰ぎ遺瀨なき 悲憤にたへぬ風情なり
隆盛莞爾と打笑みて やよ平野氏酒盛の
興をさますな兔に角に 今宵ばかりは慷慨の
思ひを廣き蒼海の 水に流して終夜

飲めや謡へやきては又 御辺が日頃たしなめる
ふえ いつきよくき また ごへん ひごろ

笛を一曲聴かせよと 事もなげにぞ申しける
うちうなす くにおみ こと ことし もう

打黙首きて國臣が やをら腰より抜き出だし
おも こ たまづさよ かり

思ひを籠めて吹く笛は 玉章寄する雁がねか
おき なみま な ちどり たまづさよ かり

沖の波間に鳴く千鳥 み空に雲や停まらん
みず うお うりよ そら くも とど

水には魚や愁ふらん 更けゆくまゝに音も亮ゆる
おり 水には魚や愁ふらん 更けゆくまゝに音も亮ゆる

折しもザンブと唯ならず 聞えし水音振り向けば
おき 折しもザンブと唯ならず 聞えし水音振り向けば

こはそも如何にこはいかに 月照隆盛兩人して
ともどもうみ と げつしょうたかもりふたり

共々海に飛んで入り 姿は見えずなりにけり
ふたり 共々海に飛んで入り 姿は見えずなりにけり

やがて二人の其の骸の 浮び出でしを國臣は
やにわ みず と から うか い くにのみ

矢庭に水に飛び入りて 水夫等と共にかつぎあげ
てだてつく たかもり かこら と

介抱盡せば隆盛は 漸く息を吹き返し
ひと たびた たま ようや いき ふ かえ

一と度絶えし玉の緒を 繋ぎとめしに引きかへて
あわ げつしょうしようにん つな び

哀れ月照上人は 此の世の縁も既に早
つ は ももちたび よ すぎたみ め

盡き果てにけん百千度 呼べど答へも亡骸に
すぎたみ め すぎたみ め

すがりて歎く重助の 姿見る目も痛はし、
にし すがりて歎く重助の 姿見る目も痛はし、

西に傾く有明の 月の光に國臣は
し 西に傾く有明の 月の光に國臣は

志た、めありし上人の 辞世の歌をよくみれば
おおきみ ため なに お

大君の為には何か惜しからん

薩摩の瀬戸に身は沈むとも

さても西郷隆盛が幕府の追手厳しくて
ろくじゅうよしゆう いま み おおつてきび

六十餘州に今は身の 置き所なき月照を
すく 六十餘州に今は身の 置き所なき月照を

救はんものと村肝の 心を千々に砕きつる
かい 救はんものと村肝の 心を千々に砕きつる

甲斐もなききの捨小舟 恨も深き蒼海へ
とも 甲斐もなききの捨小舟 恨も深き蒼海へ

共に其の身を沈めんと 覚悟定めし友垣の
こころ 共に其の身を沈めんと 覚悟定めし友垣の

心の中こそゆかしけれ 沖の波間に月影の
い 心の中こそゆかしけれ 沖の波間に月影の

入りし其夜も早や既に 夢と過ぎける十七年
かな 入りし其夜も早や既に 夢と過ぎける十七年

悲しき月日めぐり来て 涙の露を墳墓に
ぬか 悲しき月日めぐり来て 涙の露を墳墓に

額づきなながら隆盛は 香華と共に追悼の
からうたいしゆたむ 額づきなながら隆盛は 香華と共に追悼の

唐歌一首手向けつゝ、いと懇ろに弔ひけり

相約シテ淵二投ズ後先無シ

豈凶ランヤ波上再生ノ縁

頭ヲ回ラセバ十有餘年ノ夢

空シク幽明を隔テ、墓前ニ哭ス